

事故原因を事前に準備する言葉

—朝茶と事故との因果をとく話—

野 村 典 彦



歩いているのは調査者だけ。そんな採訪経験から、鉄道や自動車、あるいは健康を手がかりとして、自らの身体の内外に拡がる世界の語られ方について幾度か論じてきた。¹ 本稿においても交通事故を題材に、総合的な身体感覚を意識しながら「口承」のいとなみを考察してみる。ただし、同時にそれは見渡される世界に発生する出来事を、事前に準備されている話型を参照して言葉にしてゆく状況の確認である。

具体的には朝茶の話を取り上げる。例えば稿末に掲げた【資料1】、これは『東白川郡のざっと昔』² 八一頁（『日本昔話通観』27卷³ 「補遺」二三二四頁）の「朝茶の功徳」に連続する、恥を忍んで述べれば15年前に私が自ら切り落とした部分である。こういう具合に朝茶についての言葉はしばしば交通事故の話題に行き着く。家の外で私達が遭遇しがちな危険はまず、交通事故といふことなのだろうか。

福島県では狐にばかにされそうな時に「ザワザワ」とか「ゾゾゾゾゾ」とか、ザ行の音で人々は悪寒を感じる。自分の地図の中に特に濃い密度で書き込まれている、狐が出る場所が催させる感覚は、身体に擦り込まれた危険予測の感覚として、やがては他の場所にあって危険を感じた時にも、磁力をもつた�行の言葉で表現することを可能にしてきた。そして、その感覚が狐を追い払うために煙草の火を人々につけさせた。煙草を吸つてばかりにされなかつた証言は今でもたくさん聞かせてもらえるし、なかにはゴールデンバットと銘柄指定の人までいる。軽い煙草では火が長く続かないという、夜中に自転車で電報を配つた人の生活の恵だ。これらの詳細は別稿⁴ を参照されたい。ところが郊外や農村部では、もはや徒步や自転車はあまり用いられない。【資料6】を聞かせてもらった日、どこでお年寄りが朝茶を飲んでいるかは初めてその集落を訪れた私にも一目

でわかつた。そちらこちらの家の前に数台ずつ電動車いす⁵が停められていたからである。

生活の中で身体の動きはひたすら軽減され、健康のための意図的な身ぶりが関心となる。会津で沢庵の漬け方を聞いていた私は、かつて漬け込み時に入れていた柿の干した皮を、「みのもんたが煮物でも何でも入れろって言つてたから、またやつてみた」と、大量に持たされて閉口したことがある。もちろん、朝茶もそうした視線にさらされている。【資料3】は若い頃に病に倒れた人であるためもあって、特に殺菌作用という「体のため」の効用が明瞭に説かれているが、こうした解釈はこの話し手に限つたことではない。最近では、朝茶について聞きとりをする際にカテキンとかテアニンとかいう単語をしばしば耳にするようになっており、そこではやはり「伝統的な食文化や諺が実は優れて健康によいものだった」という復古調の話型⁶に寄りかかっていくことになるのだけれども、この資料においては、後半に述べられている健康についての発言が自らの身体内部にイメージされる世界に能動的に関わつていこうとする言葉であるのに対し、前半に述べられているのは身体外部に見渡される世界との関わり方が受動的な、偶然に左右される場面における朝茶の効用であることを見落とさずにおこつ。

そして、このような健康効果からの言及でなくとも、「朝茶はその日の難のがれ」という言い回しの「理」は、現在でも多

くの人々に共有されるものである。例えば【資料1】の後半では、「昔は、それ、蛇がいたつていうから。ここらみたいに、今の蛇とかつていつたつて、蛇ももつと大きいやつなんでしょう。いたつたから、いたんでしよう、俺わかんねえけど、それはね」と、「昔の」世界に爺と婆とを呑むような大蛇の生息を仮定することによつて「朝つ茶つて、そむくもんじやない」の信憑性の向上につとめている。

けれども、この言い回しの「理」を支えるのは、何より効用の曖昧さにあるようである。【資料4】の前半では「菖蒲湯さ入つとマムシにくつつかんねえなんて言つたんだ。そうだ事あんめえけど、いれば、くつつかれるばい」と、菖蒲湯の効用が具体的に述べられた後、その具体性ゆえ効用が否定されている。しかし、後半、朝茶の効用は、せいぜい「きつそいい」と言及されるのみ。具体的に何であるかは明らかにされないのである。したがつて「朝茶はその日の難のがれ」という言い回しを、茶の含有する成分の健康面への効用として、あるいは「せつかち」を戒める、精神的なゆとりをもつ必要性として、様々に説明し直すことが可能になる。朝茶の効用は福島の言葉で「難にでつかさねえ」という偶然性でしかない。しかも「蛇呑め」と聞き違える「朝茶の功德」はともかく、各地の資料集を見ると、敵に追われる武将や追いはぎに狙われる旅人が朝茶を（もう一杯）飲んでいる間に追手をやり過ごすといった難のがれを描く話が少なからずある。⁸朝茶の効用はタイミング、それも家の外で強

く期待されるものなのだ。そして、ここに、現代が自動車社会

であることが共鳴する。【資料2】は、お茶を出してもらつた場面、忘れたフリが見え見えの、いやらしい誘導尋問になつてしまつているのだが、東京から自動車で来た息子の帰り際にこうした言葉が用意される状況が見てとれる。見送る側が道中の安全を祈るほかできない以上、事故防止としての有効性を朝茶は現代にあつても期待されるのである。

先に触れたような、狐が出るということで緊張を強いられるところの自らの地図の中で密度の濃い箇所や、「ザアアアアアアア」「ゾゾゾゾゾゾゾゾ」「ゾゾーツ」といった身体を感じる気配は現在では失われ、改良された道路によつて均質に広げられた世界を、快適な空間として外界とはガラス窓で区切られた自動車で勞なく、そして何の不安もなく通過する。事故の発生を前提としない無防備な身のこなしが、「朝茶はその日の難のがれ」という万能の加護を要請しているわけである。狐が人をばかりにすることもなくなり、道路も車両も良くなつた今日、事故の原因は『タイミングⅡ難』にしか求められない。たとえ家の近くであつても狐にばかりにされたりする真つ暗な山道を自転車で移動するのであれば、煙草をくわえるという狐からの能動的な危険回避の業があつたわけなのだが、大きな機械の力によつて大地を制圧し、家の外にも危険のない空間を確保した途端に受動的な難のがれへの依存が強まるという皮肉とも言える結果がもたらされたのだった。

◇

櫻井徳太郎の昭和40年代の文章には「もう一便遅らせたら飛行機の墜落を免かれたのに、急いでそれに乗つたために命を失つたとか、あるいは乗る予定であったのが、何かのはずみで一便遅らせたために、危つく一命を助かつたとか、そういう話はよく聞く」といった事例を用いながら「事故の偶発性」が「呪術や呪法に頼ろうとする要求」の基盤として現代社会でもあり続けるといった記述がみられるのだが、まさに領ける。ただし、これだけでは反射板に交通安全と印刷した御守りを車体後部に貼付する行為の説明との大差なく片付いてしまうので、「話」として、呪術とか信仰とかとは一步距離をおいておく。戦時中を生き抜いた人々はまさに奇跡という名の偶然の積み重ねに命を左右されてきたのであるが、戦後にあつても、例えば『週刊新潮』昭和33年9月1日号がタイミングひとつで命が左右されることを劇的に報じている。「私は死神から逃れた一七時三十五分をめぐる運命の人々」と題される、民間航空再開7年での飛行機事故の記事である。事故の度に乗り合わせなかつた人の偶然が言葉にされている（21世紀最初の9月11日についての偶然も、幾度か報道された）。私自身も佐久間充『あダンプ街道』（昭和59年・岩波書店／岩波新書）に何例も示されている「ダンプが家に飛び込んで」の事例を引くまでもなく、家の中にいても自動車が飛び込んでくるかもしれないと言わねながら高度成長期に育ってきた。それが奇跡であるか、そ

れとも悲劇であるか、事故とタイミングについての話型を私達は感情に訴える仕掛けとして使いこなしている。

そこに語られるのは『便利』受動的)に生活する「私達」であり、『見送る・残される』受動的)な「家族達」である。その物語は『タイミングで偶然』受動的)に選ばれてしまった

「家族達」のあきらめきれない感情の処理なのかもしねない。

そして、「家族達」が「私達」でなかつたことによつて「私達」聞き手の感情に強く訴える。あとは、そこに朝茶とか御利益とかが結びつかず、つかないかと言つてもよい。受験戦争と言つた時には弱肉強食の能動性を伴つていたのかもしれないが、交通戦争という言葉は『被害者』受動的)の立場から流通したのではなかつたか。とりあえず、ハンドルを握つて加害者に

りうる立場から「戦争」を名乗ることはなかつたように思う。

週刊誌の記事として編まれれば特定の出来事についての物語集になつていくわけだが、それでもなければ物語は自身の物語として静かに堆積していく。おそらく、物語は『受動』を自らの手で捉え直すいとなみもあるはずだ。一代記を出版するような創業者の人生は波瀾万丈かもしれないが、多くの人々は確かに毎日を重ねていることだろう。『物語』静かな能動性)のまなざしによつて穏やかな毎日の生活を見渡した時、事故は語らずにはいられない出来事になる。けれども、出来事は必ずしも言葉に先行するとは限らない。



実際に交通事故に遭つたという【資料4】の後半と【資料5】とを読み合わせてみよう。【資料4】は怪我で済んだが、【資料5】は即死。朝茶を飲まなかつたのが【資料4】、一杯しか飲まなかつたのが【資料5】。だが、聞き手側の質問に左右されているようだ。「朝お茶を飲むと」と聞いたのと、「二杯飲むもんだつて」と聞いたとの違いにすぎないと言つてしまつてよいのではないか。『注ぐ相似』が事故の話の前に話題にのぼつたか、事故の話の後に話題にのぼつたか。この二つの聞き取りの場で交わされた質問と答えとの内容は、質問の仕方によつて順序は違つたものの、ほぼ同じだつたとみてよい。怪我で済んだか、即死だつたか、朝茶を全く飲まなかつたのか、それとも一杯しか飲まなかつたのか、という要素は、その場での話題ののぼり方や、話し手の盛り上げ方によつて自在に表現される。さらに言うならば、二つの聞き取りの場は直線距離で8キロ、事故に遭つた爺ちゃんの集落【資料5】の話し手・妻の実家のある集落)と【資料4】の家とは直線距離で6キロ少々、たまにして離れている場所ではない。どちらの資料も老人クラブの用事でバイクに乗つてゐるところをみると、同じ事故だつた可能性さえ否定できない。つまり、実際にあつたんだと、ひとこと言えれば、負傷事故だろうが死亡事故だろうが、詳細はどうでもよいといつてしまつても構わないだろう。

こうした流動的な表現がなされる場合も含めて、もう少し丁寧に叙述のされ方に目配りしておこう。

まずは「朝茶の功德」。『東白川郡のざつと昔』に収めた資料を見ていただければ、「蛇がいたんだって」、「って言つたって」、「のがれたって」と、念入りに伝聞であることを示しながら、「だから……飲んで来るもんだってね」と現在に行われる朝茶の実効として受け取っているのがわかる。「昔」の一回的な難のがれを起源として「現在」反復される行為の意味が確認される。おそらく、この「昔」の語りを「現在」で受け取るという叙述の一うねりをもつて、15年前の私は昔話集に収載する範囲を判断したのだと思う。次に関東地方北部の平将門の伝説などにみられる、一杯茶を戒める由来。（注8）に紹介したものなどである。やはり朝茶に関する言葉を携えて「現在」へと「昔」から語られてくる。

ところが、（注7）に示した資料などでは、すでに「一杯茶は飲むもんでねえ」という言い回しが存在しており、その禁忌を破つて痛い目にあうという展開になる。痛い目とは、追いはぎに身ぐるみ取られる、命を取られる、馬の足にマムシがくつつくなど種々あるのだが、いずれも「昔」の一回的な難のがれを起源として「現在」へ向かつてくる話ではない。一杯茶を戒める言い習わしを破ることによって殺された人物。「反復される現在」の言い習わしの逸脱として言葉にされた事件。伝説と言うのが躊躇される朝茶の言葉も少なくない。

おそらく、追いはぎなどという現代的でない言葉を用いなければ、追いはぎを交通事故と言い換えてしまえば、それはほほ

【資料3】と同様になる。「昔」が「現在」へと引きつけられるのではなく、「難のがれとしての朝茶を反復している現在」の向こうに透けて見える、ある事故への言及とでも言おうか。さらに、こうした傾向が顕著に認められるのが、【資料4】の後半の朝茶の話である。私が「きつそいいの?」と発言する以前の部分（♣印までの部分）では「言うばい」、「言うと」、「飲むね」、「飲むぞい」、「言うと」、「こう言うだ」と、現在の一般的な言葉のやりとりとして述べられているわけだが、私が口を挿んだ以後の（♠印～♥印）部分では事故の話に流れ込み、「言つたら」、「言つたのに」と過去に起こったある事故について述べられる。♣印までのカギカッコには、よく行われる言葉のやりとりとして、発言者の顔を伴つていないので、♠印♥印のカギカッコには特定の人物の顔が付されているのである。先程、【資料4・5】は表現は違うけれども同じ事故かもしれないと設問の立て方が発言を左右するという資料の読みをしたわけなのであるが、この「繰り返される現在」から一回の事故へという言葉の流れは単純に聞き取りの話題の流れと片付けられるものではあるまい。♠印～♥印の具体的な事故の話から固有名詞を省略した説明を♣印までにしているのではない。♣印直前「きつそいいんだから、お茶御馳走になつてくれ」って、こう言うだ」は、何事もなく繰り返される毎日の描写だ。そこから逸脱した場合、事故が発生する。「繰り返される現在」である♣印までを前提としなければ事故は発生しない。おそらく

く【資料4】ほど明確にみることは難しくても、朝茶と事故が話題にされる時には、この前提がまとわりついているはずである。醒めた見方をしてしまえば、朝茶を飲んだのに事故に遭つた場合、朝茶を断つても事故に遭わなかつた場合、問題にされることはない。事故に遭つた人が朝茶を断つていた場合、あるいは奇跡的に事故を回避した人が朝茶を飲んでいた場合に限つて、前提となつてゐる言葉のやりとりが参考され、その朝の風景として具体的な顔や声を獲得する。【資料4】は前提となる言葉のやりとりまでもが説明された事例なのだった。



私達に説明するためには言葉にされる「口承」の場といえは、典型的なのが、「天から禪」を聞かせてもらうなかに出てくる言葉のやりとりだろう。年寄が孫に伝えるという実践の中では伝承の場面が再演される事はないだろうが、採訪者に伝える時にはしばしば、伝承の場面が再現される。¹²朝茶についても、子供に効用を教え論す必要があれば話題にもされるだろうが、「朝茶を飲んでいきなさい」「いや、急いでいるので遠慮する」「朝茶はその日の難のがれなのだから断つてはいけない」という台詞の往復は、日常的には各人の胸にお決まりの物言いとして静かに共有される。ただし、「長い話、長い話教える」といふのは、それらが一般的な言葉であったとしても、言った、もしくは言われた経験が重ねられて、語り手聞き手に自分の姿を置きやすい。それに対して、【資料4】◆印までのカギカツコ

は、常備された台詞の往復という性格を強く持つており、自らがそうした言葉を用いた経験は問わされていない。「天から禪」の場合は、その言葉のやりとりの場から、もう一段、昔話の世界へと導いていかれるのに対し、朝茶の場合には、あくまでも「現在」として捉えかえされることになる。

では、発生した事故の話の前後に注目しよう。♠印から具体的に事故の話をしてきたわけなのであるが、徐々に一般的なもの言いに回収されようと、その具体性が♥印あたりでぐらついてきている。その後、「そう言われんだ。だから、「朝お茶きつそいいだから、飲まっしね」って、やつと、じゃ、飲んで来た方がいいね」は、もはや一般的にお馴染みの決まり文句に近い。朝茶を断つて事故に遭つた場合には、飲んでくれば怪我しなかつたつて「そう言われんだ」。♠印～♥印の実際にあつた事故の話は♥印～♦印で自らの毎日を律する決まり文句に戻り「現在」を支える。すなわち、【資料3】にみられるように、具体性を放棄し一般的に「よく言う」「よく聞く」話として、【資料1】に見られる「いくらでもある」話として、何気なく毎日の生活に寄り添うわけである。

この「いくらでもある」とか、「よく言う」に対して「どのくらいよく言うのか?」という質問は話を聞かせてもらつている立場としてはしづらい。【資料6】のように劇的な体験、この人は「朝茶を断るものではない」と諭されて朝茶に呼ばれている間に自分の行こうとしたジャガイモ畑が土砂崩れで流され

たというのだが、こんな体験をした人が「絶対はずさんねえわって思つてる」のや、【資料4】のように具体的に事故に遭つた人の人名を挙げられる人が「正しくする」のは当然として、「【資料2】でも東京から車で来る息子らを中心配して「今だつて言います」あたりを参考にすれば、地域内で朝茶に呼ばれるような人間関係の中で朝茶を断るようなことがそうそつあるとは考えにくい。すると、【資料4】の♣印までのような「よく言う」言葉のやりとりを言葉にする機会は、実際にはそれほど多くはないはずである。「よく言う」は「言うことがよく知られている」の意と理解すべきだろう。日常的には静かに共有されて朝茶の背後で「現在」を支えているだけなのだが、実際の事故の発生を知らされた段階で、朝茶という言葉に孕まれたお決まりの台詞の往復する状況が、朝茶を断つことによる因果を生成していくのだ。その時に、台詞の往復は具体的な人名と場面を獲得し遵守を促した後、再び一般化する。つまりこの♣印まで、そして【資料3】にみられる言葉の往復は、引用の素として存在する会話、まさに話の錆型とでも言うべきものだ。そして、訪問した私達に尋ねられる中で、場合によつては一回の事故と「反復される現在」とが重ねられながら、「いくらでもある」「よく言う」話は、言葉にされてくるのである。

こうしてみると、朝茶をめぐる言葉の往復は決して過去の出来事の報告という次元には留め置くことのできない、日常の理の表出として認めることができる。言うなれば、日常生活に潜

在する「理」あるいは「律」の回路であり、将来に向け待機する出来事の場面である。極端に言つてしまえば、こうした物言いの型として胚抱されているのは将来の経験の芽、将来の記憶の芽である。ここで確認している参照されるお決まりの型と実際の出来事の関係は「狐にばかにされる」ような体験にも、おそらく共通だろう。私達の世間話のききとりは、言葉として運動する「口承」をすくい取つてゐる場であると共に、人々の日常を支えるところのものの考え方を採訪という「口承」によつて顕在化させながら聞きとつてくる場でもある。

◇

「口承」のいとなみとして、ほんとうの話がなされる場合、出来事を中心に周辺に拡散していく躍動感のある連鎖、例えば噂話が、まず想起される。この活力源となるのは、話のおもしろさであり、半信半疑のきわどさであり、うさんくさい刺激であるだろう。一方で、戦争体験や日常生活の話まで視野に入れてみても、緩緩と重ねられるほんとうの話が際限なく収集されていく気配はない。話し手と聞き手との間で、書き手と読み手との間で、暗黙の価値判断がなされているからだ。¹⁴型にはまったく物言いに寄りかかるとする場の問題は、世界を見渡すものの見方、価値観の形成のされ方にも通じている。世間話研究における話型とは、記憶の蓄積を現在に活かそうとする思考の在り様を解きほぐしていく方法に求められるべきであろう。

付記 本稿を記すにあたり、引用した資料をはじめ朝茶の資料を飯倉義之氏にたくさん紹介していただいた。感謝申し上げる。

〔注〕

(1) 拙稿 a 「史話—地域を語る文芸」(『世間話研究』8号／平成10年)・b 「自動車が走る暮らし—道路・生活・世間話」(同9号／平成11年)・c 「鉄道、あるいは旧道—地域の物語と身体の移動と」(『□承文藝研究』23号／平成12年)・d 「健康に生きる—「知識」の流通と身体の自覚」(『世間話研究』10号／平成12年)・e 「狐にばかされたという事故の話—昔の暮らしと自然とが失われゆくこと」(同11号／平成13年)。

(2) ざつと昔を聴く会編／昭和61年／ふるさと企画。

(3) 稲田浩二編／平成元年／同朋舎。

(4) 注1。拙稿e。

(5) 運転免許更新の際に渡された『交通の教則—運転者用』(第3改訂版／平成12年／監修警察庁交通局／編集・発行(財全日本交通安全協会)卷頭の「トピックス」も①チャイルドシート②携帯電話③電動車いす、である。

(6) 注1。拙稿d。

(7) 今回の資料には具体的に「せつかち」を戒める発言のあるものを取り上げていながら、これも頻出する解釈である。例えれば、持谷靖子『どちらみばあの昔ばなし』(昭和61年／上木新聞社出版局)収載の「一杯茶は飲むもんじやない」(群馬県利根郡新治村猿ヶ京・大正3年生まれの女性)を参照。

(8) 一例として、高田十郎「各地のいひなはし(其五)・(二四)上野前橋在磯田四郎君談」(『なら』18号／大正12年／自刊)を引用する。「一杯茶」モノモノデナイ。ソノワケハ、昔、平ノ将門ガ、戦場カラニゲル途デ、民家ニ入ッテ、茶ヲモトメタ。一碗デ立去ラウトスルト、主人ガカサナテ一碗ヲスマル。将門ガ、ソノニノ碗ヲノンデル中ニ、追手ハ、ソノ外ヲ通リスギテ、将門ハ危イ命ヲ捨ツタ。コノ縁起ニ基テ居ル。その他、『秩父民俗』11号(昭和51年／秩父民俗学会)六〇十一頁、『滑川村史 民俗編』(昭和59年／埼玉県比企郡滑川村)五五〇頁、など、多くの事例がみられる。

(9) 注1。拙稿b。

(10) 櫻井徳太郎「民間信仰と現代社会—人間と呪術」(昭和46年／評論社)『民間信仰の研究 下 櫻井徳太郎著作集 第四卷』(平成2年／吉川弘文館)所収)。なお、『著作集 第四卷』には類似する記述を含む文章が他にも数編収められている。

(11) 創業者の一代記については、拙稿「三本の焼き芋—学校長の物語」(平成7年／野村純一編『昔話伝説研究の展開』／三弥井書店)参照。

(12) 伝承の場とともに語られる昔話の例は『東白川郡のざつと昔』(注2)八八頁「天から禪(学校帰りの話)」や『石川郡のざつと昔』(平成3年／国学院大学説話研究会)百五十四頁「長い話(天から禪)」など。『民話と文学』33号(平成14年／

民話と文学の会)にも、岐阜県の資料を紹介した。

(13) この土砂崩れは大きな被害をもたらし、河川の改修に伴う道路のつけ替え、橋のかけ替え等の大規模な工事が続いている。通過する自動車は新たに設けられた幅の広い道を通るため、これも綺麗に舗装整備された集落の中の道は電動車いすを用い、るのに非常に都合のよい状況となつた。

(14) 【資料4】の後半で、聞き手である私は、はつきり口にし

ている。「民話」に携わる人々の発言を「聴く語る創る」第6号（平成10年／日本民話の会）に参照すれば、「現代民話の中で、戦争の話というのは大切だと思うから、こうした話を

（五月節供の由来～朝茶の功德に續いて）
「いや、急ぎだから飲まないで行きましたよ」
つて、行くつて、お茶を一杯飲めば難をのがれるのに、それ、飲まないで出て行つて交通事故に……。いくらでもありますよ、そういう事は。

うん、ちょっと遅れるからね。一分とか二分とかね、遅れつ
から、そうすれば、なにがのがれられると。じゃから、朝つ茶
つて、そもそもんじやないつてね。早く言えば、その日の難を
のがれるつてね。

て、「話」として共有することが必要」（根岸英之「市川の伝承民話——生活譚の展開と可能性を中心」）（『昔話伝説研究』17号／平成5年）という生活譚についても同様。

(のむら・のりひこ／和洋国府台女子高等学校非常勤講師)

だから、昔のお爺さんとお婆さんが「ちやを飲め」って、お茶を飲みなつて言つたのからくるんじやないかな。うん、昔はそれ、蛇がいたつていうから。ここらみたいに、今の蛇とかつていつたつて、蛇もつと大きいやつなんでしょう。いたつたから、いたんでしよう、俺わかんねえけど、それはね。

〔資料〕

【資料1】昭和60年11月・福島県東白川郡矢祭町小田川・明治45年生まれ・女性

【資料2】平成12年11月・福島県西白河郡大信村下新城・夫は大正2年生まれ、妻は大正5年?生まれ

「いや、なんか、前にね、お茶御馳走になつてたら、「朝のお茶は……」、何だつけ……」

妻 難を逃れる。その日の難逃れ、つて。

夫 茶柱がでつと……。

—「二杯飲め」とかつて—

妻ええ、二杯。

「一杯では、あれだから、二杯飲まつせ」つて。

夫 茶柱が立つと、なんとかだ、きつそがいいとか、なん

とか。

—茶柱がたつときつそいいんですね／ノートに記入しながら

—

うちの息子らも、東京あたりから来つと、

「一杯じゃあれだから、そこらで事故起こるとしようがねえ

から、二杯飲んだけ」

なんて、おらも今だつて言います。

—車だから—

妻ええ。

【資料3】平成11年8月・福島県西白河郡大信村町屋・大正11年生まれ・男性

「朝は必ずお茶を飲まなきやいけないとかつて言いますか？」

朝茶……

朝茶……それは言うわね、やつぱ。あと、あと一杯、お茶飲

んでれば事故にあわなかつたなんて、よく言うわね。

—え？—

「お茶、もうちつと、もう一杯飲んでかし」

なんて、よく言うわね、

「いや、忙しいから行く」

なんつって、そして途中で事故にあつたなんて話ね。

「あん時、もう一杯飲んでしゃべつてれば、その事故からの
がれた」

なんて言うな。そういう、あれも、よく聞くわな。

「お茶一杯つちゃねんだ」

なんて、よく言うんだわ。朝茶はやつぱり一番いいもんね。体
のためにね、殺菌しつから。朝茶はやつぱり一番いいのは。お茶に梅干し
ね。これは昔からの定番だっぺね。やつぱり昔からあんだね。
今、そういうふうにやつてる人、あんまりいねえけども、ど
つちも殺菌作用が強いわけでしょ。

【資料4】平成12年8月・福島県西白河郡大信村下新城・大正2年生まれ・女性

——あとねえ、五月のお節供に菖蒲のお風呂つてやりましたか?

——やつた。今だつてやるわい。

——今でもやるー

——今でも菖蒲とつてきて、菖蒲とね、蓬、餅草と、やつと、クソユビにくつつかんねえ、なんて言つたんだ。昔は。

——えつ? —

——ええ、菖蒲湯に入るとクソユビにくつつかんねえ

——ノートに記述しながらの発言

——うん。今だつて、菖蒲とつてくんだわ。

——菖蒲湯には菖蒲と餅草を入れるの。クソユビつてなあに? —

——クソユビつて、マムシ。マムシの事、クソユビつていうんだ。

——マムシにくつつかれつと大変だからね。

——何で菖蒲とマムシと関係あるの? —

——何だか、それ、菖蒲湯さ入つとマムシにくつつかんねえなん

て言つたんだ。そうだ事あんめえけど、いれば、くつつかれる

ばい。くつつかつた人いるぞい。そつちのヤシキの。俺くらい

の人だけつとも、俺のひとつばかり小っちゃい人が娘と田の草に、

こう、行つたつぱい、もと、田の草とつたからない。そうした

らば、くつつかつた。ザアつと、クソユビくつつかつちやつた。そうしたら、その娘、娘の亭主がいて、じゃあ大変だつて、ここん所、ぎつちり縛つてね、そして、白河の厚生病院さ連れて行つたつぱい。そうして、ぎつちり縛つてあつちやから、毒が回んねえから、大丈夫、治つたない。治つて、今、仕事やつてつけつちよも……、俺よりひとつくらい小つちやい人なんだ。十年もしねえうちだつぱい。

——怖いねえ。 —

——この後、蛇よけやマムシ酒の話があつて

——あとね、朝、お茶を飲むと悪い事がないとかつていうのは言いますか? —

——そうだ事は言うね。

——「朝お茶飲まっしえ、お茶飲んでかつしえ」なんて。

——「忙しいから飲まねえで行く」なんて言つぱい、

——「じやけつちよも、朝お茶つちや難が逃れるつて言うんだから、何かあつとしようがねえから、飲まっしえ」

——つて言うと、

——「じゃあ、飲むか」つて、飲むね。

——「朝お茶だから飲まっしえ」つて言うと、飲むぞい。

——「忙しいから、今日は忙しいから休まねえで行く」つて、

——「いや、朝お茶飲んでかつしえ、きつそいいんだから」

——つて言うと、

——「きつそいいんだから、お茶御馳走になつてくか」

つて、こう言うだ。♣

—きつそいいの？—

きつそいいの、朝お茶つてね。

—難逃れになるの？—

♠難が逃れる。んじゃから、今言つたタソユビくつつかつた人の、あんにや様……、あんにやだ、あんにやだつべなあ……、そうだ、あんにや。あっちの小字の方から来たんだけつとも、そのあんにやが老人クラブの用で用足しに行つたんだって。そうしたら、

「お茶飲んでかっしえ」

つて言つたら、バイクで行つたんだけつとも、

「お茶飲んでかっしえ」つて言つたのに、なんだ、

「忙しいから飲まねえで行く」

つて、飲まねえで來たの。そうしたら、その時、事故に遭つてな。その時、お茶飲んでは、逃れるんだつたつて、そう言つたね。♥そう言われんだ。だから、

「朝お茶きつそいいだから、飲まっしえ」

つて、やつと、じや、飲んで來た方がいいね。朝お茶飲まねえで行つたために、来て、お茶飲んでくれば怪我しなかつたつてゆつたつぱい。◆

—あんにやさんが怪我したのは、いつ頃の話ですか？—

四……、五年くらいなつぱい。

—じゃあ、昔の言い伝えは大事にしないと—

そうだ。何でもね、昔のタトエに嘘はねえつて言うばい。んじゃから、昔の事いいんだ、なんて言わねえで、正しくしなくちゃね。

—朝お茶は一杯でいいの？—

いや、二杯だね。

—一杯ではきつそわりい。じゃから、

「たくさんだ」つて言うけつとも、

「じゃあ、注ぐ真似すつから」

つて、こう注いで、一杯にすんだね。一杯ではきつそわりい、やつぱ一杯ではきつそわりい。じゃあ、

「忙しいから、御馳走になつたから、一杯で行くべえ」

つて、言うと、

「いやあ、一杯じやきつそわりいから、いま一杯注ぐ真似しつから」

つて、ちゃかちやかと注いただけでもね、二杯になんだ。今だつて、それはやんね。

【資料5】平成12年8月・福島県西白河郡大信村隈戸・夫妻ともに昭和15年生まれ

II不思議な事ではないんですけども、朝起きて仕事に出る前に

朝茶は二杯飲むもんだっているのは聞いた事ないですか?!!

〔夫〕 あるよ、それは。朝茶を飲む時には一杯では止めるな、

注ぐ真似しても二回飲め。

〔妻〕 何しても?!!

〔夫〕 なんぼ忙しくても……、

一杯では止めるな、入つてもいいから二回注いで、

また二杯飲め。

〔妻〕 注ぐ真似だけでもいいから、二回……!

〔妻〕 難をのがれるって言うんだと、朝茶は。

〔夫〕 朝茶は難をのがれる!!

〔妻〕 あの、一杯つていうのは仏様なんだ。仏様つて、みんな一杯しか上がってねえべ。

〔夫〕 だから、本当にね、実際にそういう事あつたみてえだよ。俺の生まっちゃ所の小字つて集落に、何歳だつペ、あ

の爺ちゃんは、あの事故に遭つて……。ほんじやから、一杯で行つちやつただつて。

〔妻〕 「いま一杯飲まつし」つて言うのに、

〔夫〕 「いい、忙しいから」

〔妻〕 バイクだつたの、その爺ちゃんはね。あと片づけ職業

つて、行つたら、途中で車にぶつつけらちやつて。
〔夫〕 ありや!!

〔妻〕 バイクだつたの、その爺ちゃんはね。ほいで畠がそこにあつたから、朝飯前行つてきただよ。その畠へ。そしたらジャガ芋流されて、みんな、こんなようなジャガ芋、いっぱい出てるの。じゃあ今度、家へ来て御飯食べて、そのジャガ芋持つて来て、みんなに御馳走するわ、なんて、大つきな籠、背負つて行つたの。そつたら、隣の、今住んでいねえけども、向かいの、隣の家の

だね。

〔妻〕 何年なつペかな、十年くらいなつかな、死んじやつて

から。俺生まれた所、小字。大里。

〔妻〕 お茶飲んでかっし

つち言わつちやら、一杯だけ呼ばれて、

〔妻〕 「あと一杯飲まつしょ」つて、て、

〔夫〕 「いや、忙しいからい

つて、何かのつたしてつたでね、老人クラブのね。そして、

〔夫〕 その時、ぶつつけらつちえ、即死だね。

【資料6】平成12年8月・福島県耶麻郡西会津町飯根・大正10年生まれ・女性

あの、雨降つたんだよな。ほいで畠がそこにあつたから、朝飯前行つてきただよ。その畠へ。そしたらジャガ芋流されて、みんな、こんなようなジャガ芋、いっぱい出てるの。じゃあ今度、家へ来て御飯食べて、そのジャガ芋持つて来て、みんなに御馳走するわ、なんて、大つきな籠、背負つて行つたの。そつたら、隣の、今住んでいねえけども、向かいの、隣の家の

婆さん、家さいただ。

「お茶飲めえ」つて。

「お茶飲んでねえで、行つて、芋持つて来て、みんなに御馳走するう」つて、言つたの。

「朝茶やめるもんでねえ」つて。

「朝茶呼ばれるつつと、一日難のがれるんだぞ」つて、言うから、

「そうかあ」

つて、入つて、お茶飲んだんだ。そんなこんなしてゐるうちに、山崩れになつたの。行つたんなら今頃、みんなどこさ行つたかわからなかつたの。それからは、朝茶だけは、「御馳走する」つて言われた時には、どんなに忙しくつたつて御馳走なつてくるの、朝茶だけは。

あん時、ほんと、そう思つたもんな。朝茶御馳走になんねれば、山の下になつて、どこさ行つちまつたかわからなかつた。

「朝茶は無にするもんでねえぞ」つたから、

「そうかあ」

つて、入つたら、そこで朝茶飲んだお陰で命拾いしたの。

一 杯
二 杯。

一杯茶は仏さん。
一杯茶は仏さん——

うん、だから朝茶一杯。少なくたつて一杯。さあつと注いで注いで飲んだつて二杯。だから出て行く時も、なんだかんで、なんの事、ゲートボールに行くのに急がせたつて、朝茶だけは飲んでくだ。それは一遍そういう為了に遭つたから、朝茶は、これ絶対はずさんねえわ、つて思つてる。

ほんと命拾いした、あの時。朝茶飲まねえでいたら、命無かつた。したけんが、

「朝茶だから飲んでかんしい」

つて、言つたんなら、何事忙しくても、入つて御馳走なつてくる。一日の、その災難よけに、朝茶。

いろんな事言うだよな。節分の豆、食べて歩くつていうと難のがれつとかな、いろんな事言うだよな。